

%で一〇〇%。

ちなみに三級が一級の八〇%すれば一二五%以上の食事がもらえた。全く無茶苦茶な使い方だった。私も体の強い方でなく、すでに血たんを出していて、あと一年もいたらシベリアの土に化していただろう。

わずか二百三十八人、前述の日、ラーゲルを出、沿線各地で合流し、千五百人ナホトカに着く。しかし露語のアルファベット順に五個中隊に分けられ、その日から選別が始まり、四中隊五十人を残し作業要員九百人が終わり、再度奥地に護送された。

幸いにもえり残り、病弱者、老人六百人の中に、浜の幕舎から第一収容所入り、すさまじい最後の洗脳教育、人民裁判をなんとか克服し、帰還船に乗船。でも船はいっつ回れ右するかわからぬと、皆戦々恐々、二十八日、舞鶴上陸、初めて喜びがわく。夢ではとおをつねりうれしさの实感を味わった。

三十日復員、二十六日目に父親の死にあい、家族五人を養うため、会社をやめ、自営業二十二年、苦勞の甲斐なく倒産、また勤めに戻り健闘の結果、ささやかながら

安住の日々を迎えている。

シベリア抑留記

新潟県 高橋 義夫

終戦後満州のうちをあちこち移動させられ約一か月、着いたところは黒河というところであった。

目の前に黒龍江の流れを見て、こんどは船で日本に帰るのだというデマが飛んだ。そこで大きな船に三日間もいろいろな荷物を積み込んで、最後に人員が残らず乗り込んで出発した。

どの方向に行くのかと思っているうちに、すぐ対岸の港に横づけとなり、今度は積んだ荷物を全部おろせという。みながっかり、とうとうソ連の地に連れてこられたという実感がわき起こってきた。そこから約四キロ離れた貨物列車のところまで、その荷物を運搬させられた。数日かかって荷物を運び終わるとみなその貨車に乗せられ、三日間走っておろされたところはチタであった。そ

の町の近くの第二十四収容所に連れて行かれた。そこに今までドイツ人の捕虜がいたという。地下の穴倉に十燭くらいの電灯が二つ三つ、目がなれないと何も見えな。板張りの二段ベットで三人一組となり、毛布一枚敷いて二枚かけて寝るのである。

翌日から作業が始まった。同じような宿舎をつくるのだ。最初平坦なところに丸太を敷きつめてかすがいでとめる。そこから七、八メートル離れたところから段々深くなるように掘っていく。丸太の下までくると、下に柱を入れて丸太が落ちないようにしながら掘り進む。こうして丸太の下を全部掘ると、今度は掘り出した土を丸太の上に四十センチくらいの厚さに敷き、上からつき固めるとでき上がる。土の中から暖かいと思いたいが、真冬になるとやはり寒い。朝目が覚めると、体の近くまで氷柱が下がっているようなこともあり、熟睡できない夜も多かった。そんな仕事が一か月も続き、五か所くらいできると、そこに日本兵が続々と送られてきてその宿舎に入れられ、我々もまたそこに移動させられた。

それからは町の清掃、パン工場の雑役、貨車の積みお

ろし作業等させられたが、そのうちれんが工場に回された。たき口が二十四か所もある建物の中に型のできたれんがを十萬枚も運び込む。ソ連の職人がそれを積み上げてゆくのだが、それが十日間くらいかかる。それから片側十二か所のたき口から石炭を投入し火をつける。十日間くらいで焼き上がり、その後やはり十日間くらい放置して、さめたころ釜出しが始まる。それでも中はまだ熱い。五枚ずつ持って出るのだが厚い手袋をしていても熱くてたまらない。外は零下三十度、釜の中は酷暑、そこを行ったり来たりの仕事はつらい。それでも最初のうちは百枚の山三つが一日のノルマで早々と仕事も終わりに休む時間もあったが、そんな我々の仕事ぶりを見てんだんと仕事量をふやされて、ついにノルマは最初の三倍となり、遅いときは深夜までかかることもたびたびとなり、体はもうくたくたに疲れる。それでも翌朝はいつも同じ時間に宿舎を出なければならぬ。一握りの黒パンと冷えたスープだけの食事でこの重労働をさせられ文句も言えない。この世の生地獄とはこのことである。

ある日同僚二人が行方不明になり探したら、近くの建

物の中でひもに下がって冷たくなっていた。つらい仕事に耐えきれなかったのだろう。涙が出てとまらなかった。

そんなことがあってから病気で倒れる人がつきつぎと出て、同じ職場の同僚が十五人も死んでゆき、死体を埋める穴掘りもさせられた。死んだ人は栄養失調で、これが人間かと思うくらい骨と皮ばかり、まるで棒のようだ。生きている我々も大同小異というところだ。最初収容所に入ったのは五百人、それが一冬過ぎたら二百人足らずで、このときばかりは捕虜の身の哀しさをしみじみ感じさせられた。

もう日本のことなど頭に浮かばない。ただただ食物のことばかり、生きるためには何か食わなければならぬ。ごみ箱の中をあさり塩ザケの頭や骨を見つけたときは本当に嬉しかった。これを燕麦と一緒に煮て食べたらずいぶんうまい。燕麦は馬小舎から見つからないように失敬してくる。また毎日ネズミ取りが日課の一つでもあった。調子のよいときには一晩で三匹もとれることがある。一日三匹も食べると翌日は体の調子もよく、仕事

もいくらか楽なような気がする。

なんとか冬を生きのびて、五月ころになると氷も解け始める。何もかも解け出すと異様な匂いがしてきた。着ているものが臭いのだから、窓のない宿舎の中は臭くてたまらない。がどうにもならない。我慢するより仕方がない。

六月になるとコルホーズの仕事にやらされた。キャベツの苗植えである。向こうが見えないくらいの畑に植えるのである。シベリアといっても日がかんかん照りつくと暑い。日陰もない畑でノルマを達成するまでは帰れない。暑さとすきっ腹で目がくらみそうになるのもたびたびであった。

夏じゅうコルホーズの仕事をして十月雪が降り出したら、今度は一行二十五人で四十キロくらい山の中に連れていかれ、伐採の仕事である。着いてみると昨日まで別の日本人がいたらしい、宿舎の前に大きな釜がある。ふたをとってみるとその裏に苦しかった伐採の様子がこまごまと書いてある。大変なところに来たものだともな顔を見合わせた。だれの目にも涙が浮かんでいた。そこで

の伐採作業は前冬の仕事より以上につらいものであった。今振り返ってよく生きて帰れたものだと思つづくと思う。

抑留体験記

福島県 有賀 貞

全抑協中央連合会の方からの要請でシベリア抑留体験記を執筆するように指名された、しかし今から四十数年前のことであり、最近記憶も薄らぐようになり、元軍人にして戦争に負けた者は戦陣訓の救いに

海ゆかばみづく屍山ゆかば草むす屍

大君の辺にこそ死なめかいりみはせじ

とあるように、死をもって奉じなければならぬのに生きてまざまざ恥をかきたくないので書き残すことはためらったが、子々孫々に敗戦の経験を踏ませたくないし、シベリア抑留などみじめなことを将来においてさせたくないで、今から記憶のあるところを記述してみま

す。

終戦になるまで

みんなも知るとおり昭和二十年八月広島、長崎に原爆が投下され、ポツダム宣言により終戦のきざしがあったのに、ソ連は八月九日満州国に進駐して来た。

吉林省吉林市機動・団司令部及び第五〇二部隊七三五部隊出動の命により吉林省敦化の西北方、東京城付近の広野に布陣すべく部隊長以下二千くらい貨車により出発し八月十一日朝、ソ連BT十七トン戦車に肉弾攻撃をした。しかし、四キロ爆弾をキャタピラにさし込んだが、一、二回で突破され、戦いはどうにもならなかった。とにかく一列縦隊で十五車両くらいの戦車が時速二十キロくらいの速さで進んで来るので応戦したものの、我が部隊は速射砲で対戦するでなし、負け戦であり犠牲が出るばかりであった。そして十五日正午の玉音放送により終戦になったそのときの悲しいこと悲しいこと。死んでしまふかなあ、これからどうなるのかと脳裏の中で迷ったが、とにかく死ぬのはいつでも死ねると思ったので部隊の命令による行動をした。そのころ若年の将校で自決